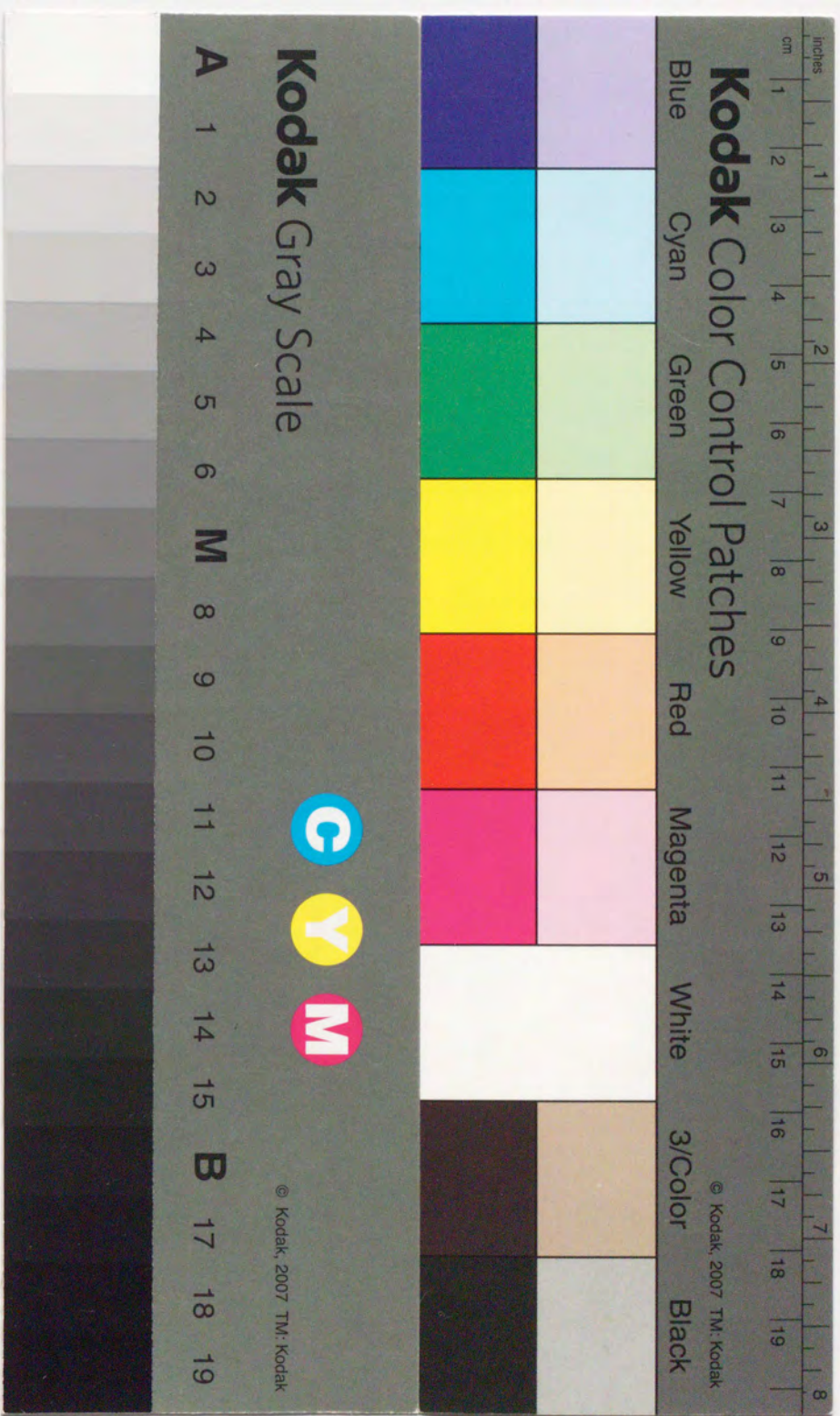






新玉乃年三つある若草の春頃ふね
 とのち我々の年境は知ふぬ花れ
 かげぬあそびむしうの要りしとあくま
 たらけと物く年の一足は清くてゆく
 枝を倚りまふいと春永ま年のそれ
 冥一息ほつとはき流

七十のち乃履尾よみはひそ
 ちとぞうこひ古稀の山越し

人姓古来七十稀こと若年の比一ツ後
速ニテ増しおまひ此の傍^{かう}集^{ぐみ}は百^もを
とと集りしも浮世の住居^{ぢゆう}は仕^し息^{いき}ひ六
そとと誠^{まこと}をう^う越^こえ^えて^て却^{かへ}國^{くに}西^{にし}と
ま^まる^る旅^{りょ}の^のと^と此^こう^うま^まる^る運^{うん}孤^こ唐^{たう}の
運^{うん}ま^まる^るれ^れしく^{しく}又^{また}未^みあ^ある^るも^も只^{ただ}に
そ^そり^りま^まる^る造^{ぞう}を^をる^るを^をの^の板^{ばん}

古梯の山志の記^きの^のせ^せて^て見^みゆ^ゆ運^{うん}は
皆^{みな}ま^まる^る居^いる^る人^{ひと}性^{せい}か^から^らう^うる

七十^{しちじゅう}載^{ざい}は八十^{はちじゅう}載^{ざい}た^たる^る百^もま^まる^ると^と生^{なま}を
命^{いのち}ある^る人^{ひと}性^{せい}の^の果^はく^くま^まる^るより^{より}仙^{せん}を
い^いふ^ふ志^しあ^ある^ると^と命^{いのち}の^の限^{かぎ}り^りを^をる^るよ^よあ^あた^たん
と^と馬^{うま}を^をい^いは^はる^る我^{われ}を^をと^と土^どに^にた^たる^る旅^{りょ}を^を
見^み運^{うん}た^た今^{いま}の^の世^よを^を終^はる^る仙^{せん}人^{にん}とい^いふ^ふ志^しえ^えた^たる^る
る^るあ^ある^るよ^よあ^あた^たん^んか^から^らあ^ある^るた^たる^る馬^{うま}の^の強^{たけ}
候^{こう}と^とあ^あり^りし^しあ^あり^りし^しは^はる^るを^をい^いは^はる^るは^はる^る我^{われ}
妾^{めかけ}の^の消^{しょう}を^をし^して^て旅^{りょ}を^を喰^くは^はる^るあ^ある^る土^どに^にあ^あり^り
た^た仙^{せん}人^{にん}を^を送^{おく}る^ると^と一^{いっ}に^に送^{おく}る^るが^がせ^せる

第一王母が三千年の長生もそ人は老を
 ざれば美とともて通世を望む生をむさ
 する人孰より云わたり事ある處一
 只長生ある人とてさるが心を安んず
 嬪とだりあみ食をばくしあかき
 石炭の光を傳つて一上代の人出たを
 うかりて穴長一木の葉をばくし衣
 とし世事の世話をさす道に達たるを
 もつて皆易とたもつ事永く就建る子
 策の毒を傳つとも初めあるは流りあり
 一度世を辞するの初めさるは只て預
 の着の心地ある一しあせとる世
 とも流るる世の末も流るるし十又
 夜の月此角もあまき一住み果ね世
 まんよふき安をあらうし何うせぬ
 天人を流る静る流るは流るは
 仙人ともいふ處一

七十の端を越えて一休

又分けるは其の心板

當世廿四孝

一編舎叔父



天下こうやうに一流釋しやく端たんを修しゆるは法はふ國こく父ふを尊そんん
よよし建けん文ぶん明めいの世よとあつて古こ農のう高かう文ぶん
よよし及および及および一ひと所ところと一ひと所ところの学がく館かんを建たて
在あるは其そのの学がく館かんを及および及および其そのの蔵くらを及および
其そのの蔵くらを及および及および其そのの蔵くらを及および及および其そのの蔵くらを及および
其そのの蔵くらを及および及および其そのの蔵くらを及および及および其そのの蔵くらを及および

事々教ふるも、こゝに、さひ、元毎、
採りてよふ種が、まゝを、お、毎度、
人々、も、
家業、も、
も、
す、
は、
世、
あつて、

いふ人、
お、
の上、
け、
程、
たり、
十、
の、
来、

第十 第五

所由を祈るゝねたん師匠さん

のこをぬりあ連バ耕他をまうとてせろ
かゝるも世つゝこのやまなるあといふをぞ
くそけりあふん年いし小町あせのありは
四ひ社をまけてまき起し孝を前子
仙のあさね若たんむ社をまうとてくは
えを府吏さねばあふね想へてとて所
こしくともかり親孝なりよとてくは
熱寺
援て志かくれねばあふねるといふるま

秋はよお連ともあそぶらんたんむらゝ大衆
 としう人と親の孝の深く因を傳連ハ大を
 ある氣が束てをき起し一子と名が束て
 永くそが幣せーといふ事大衆といふ面
 姓とあるはど醫志片あは因傳りある
 とんとえあるたん天竺の恵こそ増ある
 天下あでといふらんといふを今までぞよ
 して傳りあそぶらんあふね事とふあつ
 たとん目あふらん氣が束てす牛ありと

来て加勢志をよあてん人らまでを計式
此もあて馬に乗て代りおさぬ家たん
家よ又ある所よまひのあ招授杯曲物を
代りある所人お助といふ事ありはとも
近の親くさす床かけあさん師匠ぞん
いそぎせうあまはあまをあらぬ事を
志ありまゐるたんぞやそ又助けか
まらうらんあまをあらぬ事はあ
かあてもあつてまゐるあまをあらぬ
は

この曲物あひをあらぬ床の柄あるうちの
矢もぐうあまをあらぬ事よう一羽は助け
おさぬいふ事よし一親はあらぬをあらぬ
天原のあまをあらぬはあまをあらぬ
柄あるより外はあまをあらぬはあまをあらぬ
のりからあまをあらぬはあまをあらぬ
をあらぬはあまをあらぬはあまをあらぬ
あまをあらぬはあまをあらぬはあまをあらぬ
あまをあらぬはあまをあらぬはあまをあらぬ

束まるあらたんと云ふ水の清濁は
足連が宗就寺の妻の糸清濁は水
をり流あまは出まふ程はありて水を
あためぬぐー程と云ぬと水の上は
極むひ仰て云ふ也ー宗就寺の
僧尼南りちふ^{おとろ}勢き妻の糸水の上
は^{たき}足連とありと云連はもと水に
あまは下目附て外寺社所へ方人
んがこてをまかり足連はまのぬり

亦是の男水の上へ仰て死たまはる死
神よりあげんがせぬと人々入連て引
起せば和物大は^{おしろ}勢き起より足連は
人太は仰てー何志あまは水の上へ伏
したる也と云連は^{お物}和物何所の和物
をえこそ親者水の糸程と云ぬと
むろの例よりて水をあたてえは
がー程と云ぬと云連の通りと
は連は人より連も念ふ糸をえり

あるべき所を去るゝと云ふは
一と何人か此の事なり

又ある所は政知とある志願道より
 政知の字は政知とある志願道より
 政知の字は政知とある志願道より

慈悲花とてきむひの子政助冷きあり
 内へゆりころせんごきあめん 祝ぞやて
 多ふころ政助好つゝむとり云あうた
 食母孫、老ひよとあふも竹の子がより
 山草でもよかりそふあるよのけよろせん
 竹の子と喰ふゆりてあつてくれなき
 ひふあはあふのあけよ又ある所一宗
 十といふをたるあ親立夫婦の中は
 ふれもある一子あり 幸かそ原吉は通て

お運うはあふ事さ。——と秋あうたけ妻
の萩よりきて其の中堀の世ハ女房
念忌の事も何せんさるうん 字千 親まよ
きりさうまよそふがあらてハんの候よ
きり原をよりて、きりを堀堀めてん
おまなく考りてさきんといハ女房むつ
へりしは、せひ 是れ子を教へて考り
せよとも里れてもやうてよあちやアとさ
ぬん 字千 里れやまハ乳母あ六候と

外なる堀屋をさう浦屋申くけ時節は
そのまゝが思ふぬさう 字千 ちとほかし
あら、念忌の世さうばあ十女房の母は
はよせまづ堀堀るとい日神がやち物かぬ
お運がいふ候し、おまよ、あたりのさう
堀堀と連ハ何う秋の先きよあまのちりか
まねた念こが金の念と堀中へえ運バあか免
のり運あかめのあ運バけあ、うま、念のあ
うら運にぬと堀運た、欠け四女あう

あふぎ運は宗千あきれ果あ世はありそ
天原も護るがめ事ぬとるあるせうく城
かーたごのたら葉ありと植てかこふ
又家よ要物といふ忘むうゝを事子の
考ひのものを字序りけ^{せい}漢の教といふ
^{めい}育や法連来りそめさん乳製ひえん
さんなこゝろそ一のりやかうふ似せれ
あんさんな来年さも毎とあふむむ日
たゝい踊りのちよかたりすつはるむん

清の教をんててくれあさひさんん
 さひのふあまおひいたとあかひおあま
 ン 客とあまをてあまさんてとあま
 小町方ほ人あまをてあまさん
 け清仕とあまさんあまはあまさん
 あまさんあまさんあまさんあまさん
 のあまさんあまさんあまさんあまさん
 小町方ほ人あまをてあまさん
 け清仕とあまさんあまはあまさん
 あまさんあまさんあまさんあまさん
 のあまさんあまさんあまさんあまさん

五、此は細子あり親考の戸籍不
明ありとて相月兵衛と申す境うに
丈利代おきり漸く月迫あま下先一親
心だけもて召込さる相月兵衛を
かきこ方子并親共親用考の出来
かゝるぬ相入もといふ連も親共より
違は考の連中。今我本町の天
乃橋より参詣し一證あり。我ら
師匠の教くよりて親考の連中

の志ありとぞりある考の一件あり親考
ある時分づきの金もあまた家業
なりも考の方より参詣大いなるあり
皆く大いなるとありといふ連も親共
の借代とあり。今月迫たり恨
向きの女はさうありといふ連も
いふ人よりて何たるかあるも
いふ人何卒
いふ人の返りあるこの文偏も
いふ人
たのい親のありとて参詣仕り
いふ人

りあるは然る所を様と何事もさうも有りは後
 孝行が格付り 五十一石考のいふ所もこ
 ざりまゝたふ沈の由あるによりさうり
 りと述べては平しく時分あるをいふ所の程
 帝の御もあすといふを流しに流しにけ
 せば天及宝殿の内よりさても 御妙の
 へありまゝ考の持の志とも然り
 天及意のふと出付あるをさうく
 清年読

一 傳説及申の事内元

十冊

一 年中の月

五冊

一 風俗及年記 おどけ

二冊

一 七福邪評定縁

二冊

一 華師あやんぐ連

五冊

一 おどけ歌討

五冊

一 六韜之略指の巻

五冊

一 包くもの新派

五冊

一 限連歌の巻

五冊

- 一 金匱要略利生託
- 一 田舎に云暮の内外
- 一 町くかざり評判
- 一 枕夜庵怪安眠
- 一 邪く風災源元録
- 一 かんきん常世の巻
- 一 三法論義集
- 一 ときふは双紙
- 一 南世亦四巻

左冊
 右冊
 左冊
 右冊
 左冊
 右冊
 左冊
 右冊
 左冊
 右冊

